

かわまえ 川前2遺跡(3次)発掘調査説明会資料

2007年10月9日(火)

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

調査要項

遺跡名	川前2遺跡
遺跡番号	平成13年度登録
所在地	山形市大字中野目字赤坂
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因	須川河川改修下流部事業
調査面積	3,500㎡
現地調査	平成19年5月14日～10月12日
遺跡種別	集落跡
時代	弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代
遺構	竪穴住居跡、土坑、ピット、溝跡、河川跡、遺物集中区
遺物	土師器、須恵器、砥石、アメリカ式石鏝
調査担当	調査課長 長橋 至 主任調査研究員 小林圭一(調査主任) 調査員 佐藤祐輔 調査員 深澤 篤
調査協力	村山教育事務所 中山町教育委員会 山形市教育委員会



山形北部 1:25,000

1. 調査の概要

川前2遺跡は山形市と中山町の二つの市町にまたがり、山形盆地の西部を北流する須川左岸の自然堤防上に位置し、古墳時代から奈良・平安時代にかけて、人々の生活が営まれた遺跡です。

発掘調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による須川河川改修下流部事業に伴って、2002年に第1次調査、2003年に第2次調査が実施され、今回の調査は第3次調査に当たります。第1・2次調査では奈良・平安時代の住居跡が多数検出され、当時のムラにおける生活の様子が明らかになりましたが、その調査の折さらに下層から、古墳時代の生活面が確認されたため、今回の調査は奈良・平安時代の調査面から20～100cm程度を掘り下げて実施しました。その結果、古墳時代前期(4世紀代)の住居跡が検出され、また掘り込みを伴わない土器の出土状況が随所に認められ、古墳時代のムラの様子が明らかになりました。

2. 検出された遺構と遺物

今回の調査で見つかった遺構は、竪穴住居跡10棟、溝跡1条、土坑15基、ピット77基、河川跡、掘り込みを伴わない土器集中区などです。

竪穴住居跡は、古墳時代前期6棟、奈良・平安時代3棟、時期不明1棟で、調査区の南側から中央付近にかけて検出されましたが、奈良・平安時代の住居跡については調査区の東側と西側の境界区域から部分的に検出されました。古墳時代の住居跡は、床面から出土した土器からST5とST9が4世紀前半、ST3

が4世紀後半に位置づけられます。いずれも一辺が約5～6mの方形で、床面が硬化しており、ST5とST9の床面の中央に地床炉が設けられていました。またST3とST9からは、4本の柱穴が検出されました。床面からはかめ つぼ たかつき きだい甕・壺・高坏・器台などの土器が出土しましたが、石製品は鉄の加工に使用したと思われるといし砥石が一部の住居跡の床面(ST8・9)から出土したのみで、鉄製品・木製品などは見つかっていません。

土坑は地面を掘り込んだ穴ですが、15基検出されました。性格のはっきりしないものがほとんどですが、古墳時代では土を浅く掘り込んで火を焚いた跡(SK11・12・14)や焼け土で埋めた土坑(SK9)も検出されました。これ等は掘り込みを伴わ



ST5 竪穴住居跡遺物出土状況



小型土器検出状況

い土器の集中区に隣接しており、何らかの儀礼に関係して火を焚いた可能性が考えられます。また平安時代の土坑(SX1)では、埋没の途上に焼土と鉄くずが認められたことから、製鉄作業に係った土坑と考えられます。

調査区の西北側から中央にかけて、古墳時代前期の土器(壺・甕・高坏・器台・小型壺など)が多数出土しました。いずれも地面を掘り込んだ形跡が認められず、特定の場所から集中したり、意図的に土器を置いた状態で出土しました。土器のほとんどは古墳時代前期の4世紀代に位置づけられますが、大きく4世紀前半と同後半の土器に分けることができます。出土時点の観察では、壺(小型壺含む)・甕・器台・高坏が多く出土しており、鉢・杯・椀は少ないようです。壺は貯蔵用、甕は煮沸用の器ですが、小型壺や高坏・器台は特別な行事などで用いられたと考えられています。

調査区北側の16-17グリッドからは、小型の甕や壺が19点まとまって出土しました。土器は逆さま、横倒し、やや斜めにした状態で、口を一定方向にそろえて配置されていました。意図的に土器が並べられており、調査では掘り込みの検出に努めましたが、確認することはできませんでした。いずれも小型土器で、非日常的な土器であることから、何かの儀式に関係して配置されたと考えられます。周囲からは、地面を浅く掘り窪め火を焚いた跡(SK11・12)も検出されており、その関連性がうかがえます。

調査区の中央には、東西に横断した河川跡(SD1)が検出されました。平安時代の住居跡を削り取っており、平安時代以降の河川跡と考えられます。須川に直交するように河幅を広げて流下していますが、北東側では北方向にも流れており、古墳時代の住居跡の一部も削られていました。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代前期(4世紀代)のムラの跡を検出しました。古墳時代の住居跡が調査区の南側から中央付近の須川寄りで見出され、遺物集中区が北西側から中央西側にかけて認められました。居住施設が調査区内でもやや微高地に営まれたのに対し、後者はやや低い場所に形成されており、日常的な



古墳時代前期の土師器

生活の場所と儀礼などの場所がある程度区別されていたことが明らかにになりました。

川前2遺跡が位置する須川下流域は、最上川との合流点近く、白川(馬見ヶ崎川)や立谷川も合流しており、水運の便に適した地域でした。しかし当時は高い堤防がありませんでしたので、増水時には洪水の危険にさらされていました。今回の調査でも冠水で堆積したと考えられる砂質土が古墳時代の面を広く覆っており、その上に平安時代のムラが構築されていました。川前2遺跡のムラは、水運の要衝として発達したと考えられますが、古墳時代に土器を意図的に配置し、火を焚いた跡のような儀礼の場が設けられていたのは、洪水を回避するための祈願や儀式がムラの中で執り行われた結果であったと考えられます。

今回の調査では、古墳時代の川沿いのムラの一端が明らかになりました。出土した遺物は整理箱で100箱近くにのぼっており、住居跡の棟数の割には大量の遺物が出土しました。住居跡が洪水等で削り取られてしまった可能性も否めませんが、それだけ土器を配置する行為が頻りに繰り返されていた結果とも考えられます。時期的には古墳時代前期の約100年間に限られており、これらの土器は当時の生活の様子や年代の変遷を考える上で、大変良好な資料となっています。今後これらの資料を整理して、この地区の歴史の変遷や景観を考えていきたいと思えます。



小学生体験発掘



河川跡西側土層断面



12 - 14 グリッド壺出土状況



19 点の小型土器が集中して出土。
洪水関係の祭祀跡？



16-17 グリッド土師器出土状況



S K 11 土坑遺物出土状況



S T 9 竖穴住居完掘状況



S K 9 土坑断面



S T 5 竖穴住居遺物出土状況



S T 3 竖穴住居検出状況

